

竹内好と国民文学論争

— 従軍体験と百花斉放運動 —

尾西 康 充

1 従軍体験を語ること—竹内好と田村泰次郎

(1) 竹内好の従軍体験

一九四三年一月九日『魯迅』の原稿を日本評論社編集部に渡した竹内好のもとに、一月一日召集令状が届き、竹内は中支派遣軍独立混成第一七旅団（通称峰部隊、旅団長高品彪少将、編成地上海）歩兵第八八大隊の補充要員として中国大陸に出征する。この年の一月に竹内は、武田泰淳、岡崎俊夫、松枝茂夫、増田涉たちとともに設立した「中国文学研究会」の解散とその機関誌「中国文学」の廃刊を決めていた。前年の五月二六日「日本文学報国会」創立の際には「中国文学研究会」も加盟を余儀なくされたが、第一回大東亜文学者会議が一月三日に東京で開催された際には不参加を表明しており、「中国文学研究会」を解散し「中国文学」を廃刊することによって、大政翼賛体制に対する最後の抵抗の姿勢を示したのである。

竹内は「中国文学」第八〇号（一九四二年一月）に「大東亜戦争と吾等の決意」という宣言文を掲載し、「十二月八日、宣戦の大詔が下つた日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持であつた」と対米英戦争を安易に肯定し、「われらは支那を愛し、支那と共に歩むものである。われらは召されて兵士たるとき、勇敢に敵と戦うであろう。だが常

住坐臥、われらの責務は支那を措いて無い」と「東亜解放の戦の決意」を語っていた。しかし帝国日本は太平洋上で早くも劣勢におちいって、竹内は一兵士として中国戦線に赴くことになったのである。

主として湖北省の粵漢鉄道（広東—漢口）警備を任務としていた独立混成第一七旅団は、一九四三年四月から六月にかけて湖北省西部および湖南省北部で展開された「江南殲滅作戦」の主力戦闘部隊として参加し、竹内が現地の部隊に配属されたのは激戦を終えたばかりの時期に重なっていた。中国側では「鄂西会戦」と呼ばれるこの作戦は日本陸軍第一軍が、当時は重慶にあった国民党政府に向かって進撃するために、長江流域の水上交通路を確保しようとして六個師団と一個旅団の兵力を投入し、中国第六戦区軍の第一〇、二六、二九、三三集團と戦闘を繰り広げることになった。はじめは日本軍が優勢であったが、中国軍を支援するアメリカ軍の空襲による犠牲者が増加してくると、日本軍は機雷の撤去を完了させただけで撤退した。日本軍の発表によると、中国軍の遺棄死体三〇、七六六、捕虜四、二七九、要塞砲（野砲級）三門、山砲八門、速射砲九門、迫撃砲四八門の鹵獲、飛行機の撃墜鹵獲二三機であった。それに対して日本軍の損害は戦死者七七一人と戦傷者二、七四六人で、戦死者一五七人と戦傷者二三八人は米軍機の空襲による被害であった^{注1}。

独立混成第一七旅団は、五月八日から一二日にかけての作戦で〈廠害虐殺事件（廠害惨案・厂害惨案）〉と呼ばれる事件を引き起こしている。

第三四、四〇師団所属の支隊とともに湖南省南原廠害鎮の包圍戦をおこなった際、廠害及び近隣住民一三、〇〇〇人、他地域から避難してきた難民一二、〇〇〇人、国民党軍第七三軍の兵士五、〇〇〇人の合計三〇、〇〇〇人を虐殺したとされる^{注2}。旅団麾下の独立歩兵大隊の大隊長五名のうち三名が戦死していることもあって指揮官の間には報復の感情が高まっていたのが、この傷ましい事件に繋がったのだと考えられる。戦後、第一一軍司令官横山勇中将に対する戦犯訴追を中国側が求めたが、横山が巢鴨プリズンで病死したために立件されなかった。

二〇一〇年八月一五日、事件のあった地に廠害虐殺事件記念館が開館し、犠牲者を悼む場になっている。敗戦時竹内は洞庭湖に臨む岳州で旅団司令部附の報道班員を務め、現地除隊して漢口に赴くことになる。敗戦三ヶ月前までは、華容県北景港で大隊本部附の宣撫班員として営外に居住する権利を得て、通訳をすらかたわら中国語教育をおこなっていた^{注3}。暗号手教育を受けたが計器類を運搬する体力がなくて失格したことなど、帝国陸軍の兵士としてまったく失格であったことを後年になって回想しているが、彼がもっとも語らなければならなかったこと——南京に次ぐ多くの犠牲者を出したこの事件——については、まったく沈黙しているのである。宣撫班や報道班は情報工作を担当するので、分遣隊の一般兵士とは違って、部隊内外的情報を広く耳にできる立場にいた。自分が直接作戦には参加しなかったにせよ、半年前にみずから所属する第八八大隊の小野寺實大隊長もそのなかで戦死するという一大事件の真相を下士官や兵士から聞いたはずである。部隊の名譽を守るためののか、戦友をかばうためののかは分からないが、真実を明かさなかった点では、ある意味侵略国家と共犯関係にあったといえ、

その竹内が戦後になって〈ナショナルリズム〉を語ろうしたことには疑念を感じざるを得ない。

(2) 田村泰次郎の従軍体験

他方、ちょうど同じころ山西省陽泉で、北支派遣軍独立混成第四旅団（通称石部隊、旅団長片山省太郎中将、編成地京都）の宣撫班にいたのは、田村泰次郎であった。一九四〇年一月に田村が補充要員として配属された独立混成第四旅団は、同年八月から約五カ月に河北省石家荘から山西省太原までの石太鐵路沿線で展開された〈百団大戦〉で多大な犠牲者を出していた。出征直後に田村が配属された歩兵第一三大隊第三中队も全滅同然の打撃を受けていた。泰次郎は同郷（三重県四日市）の先輩丹羽文雄が陸軍報道部長の馬淵逸雄中佐に依頼した結果、旅団本部附の宣撫班に転属された。宣撫班では、日本軍の捕虜になった中国共産党軍一二九師の劇団員を使って反共親日の宣伝工作をする「和平劇団」を結成し、革命根拠地が点在する山西省内の農村を巡回公演することになった。

田村は、復員後まもなく「肉体の悪魔」（『世界文化』第一巻第八号、一九四六年九月）、「肉体の門」（『群像』第一巻第三号、一九四七年三月）、「春婦伝」（単行本『春婦伝』、一九四七年五月、銀座出版社）の〈肉体三部作〉を発表し、〈肉体の解放こそ人間の解放である〉とする〈肉体文学〉の旗手を務めた。これらの作品は軽佻浮薄な風俗小説と思われるが、ちだが、「春婦伝」は山西省孟県を舞台に、階級と年次による厳格な差別の下、完全な服従が強いられた日本軍の非人間性を朝鮮人慰安婦の視点から告発する作品であった。「肉体の悪魔」は和平劇団の女優張沢民をモデルに、敵味方を超えて〈肉体〉の自然な欲求から男女が結ばれる

という戦場での恋愛小説である。宣撫班員の「私」に向かって張は、八路軍総司令部や晋冀魯豫辺区政府、中国共産党北方局のあった河北省滹県にいたときの生活を語る。

八路軍のなかでの合唱のさかんなこと、朝のまだ暗いうちから抗日歌や革命歌を合唱する兵士たちの歌声が、漳河に沿うた川霧に閉ざされたあちらこちらの部落から、また峰々から湧きおこり、それぞれが反響しあつて、太行山といふ大自然を舞台とした一大交響楽のやうに聞かれる、それが太行軍区の朝の挨拶であるといふ話など、生活力に溢れた自由な軍隊の雰囲気を感じられ、日本軍の窮屈な軍規といふものに縛られてゐる私たちには、まるで別の世界のやうに思はれた。

張は出入りの中国人をみつけると、抗日歌「黄河大合唱」のメロディを口笛で吹いて、自分の消息を同志に伝えようとする。しかし彼が二重スパイであつたために、張がそれまで一二九師三八五旅衛生部看護婦であると話していたのは嘘で、実は太行山劇団総団第二分団の女優であつたことがばれてしまう。もし彼女が中国共産党員であることが日本軍に知られれば、厳しい訊問の末に銃殺されてしまう運命にある。だが張はこの小説のなかで「私」に向かって、「日本帝国主義は永遠に中国民族の敵である」と三回——はじめて会つたとき、肉体的関係を持ったとき、最後に別れるとき——語っており、終始自分の「民族的立場」を守つていたのである。田村は「肉体の悪魔」の他にも、自分が宣撫班員であつたときに得た情報にもとづいて、市民に対する虐殺や慰安婦の問題を小説に書き、帝国陸軍の加害性と暗部を告発し続けた。

「群像」編集長を一年間務めた大久保房男氏は、田村の小説には戦争から帰ってきた人間の生命をかけた強さがあり、それが広範な読者を惹きつけたと分析する。大久保によれば、林彪や毛沢東、周恩来の名前を知つたのは田村との会話からであり、田村はしきりに中国共産軍をほめていたという。国民文学論争において、「竹内は「八年の抗日独立戦争」を支えたものは、中国国民における「単一社会の構成員としての責任の自覚」で、「日本の軍閥だけでなく、日本の知識人もまた、このような国民感情の所在を見あやまった」と指摘したが、竹内が理想化する「国民感情」は田村の小説によって巧みに描き出されていたといえるのではないか（「中国文学の政治性」、「思索」第一四号、一九四八年九月）——。

(3) 文学者の戦争責任とは

敗戦後、「日本における民主主義的文学の創造とその普及、人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚とその結集」を呼びかけた新日本文学会が文学者の戦争責任を追及し、「新日本文学」第一卷第三号（一九四六年六月）に主要な責任者の「第一回発表」分として菊池寛や久米正雄、高村光太郎、斎藤茂吉、火野葦平、横光利一、河上徹太郎、小林秀雄、亀井勝一郎、保田與重郎、林房雄、佐藤春夫、武者小路実篤など二五名をリストアップした。一九四六年三月二九日の新日本文学会東京支部創立大会において、文学者の戦争責任を追及する必要性を訴えていた小田切によれば、このリストの選考には「文学及び文学者の反動的組織化に直接の責任を有する者、また組織上さうでなくとも従来その人物の文壇的な地位の重さの故にその人物が侵略賛美のメガフォンと化して恥じなかつたことが広汎な文学者及び人民に深刻にして強力な影響を及

ぼした者」に重点をおいたとする（「文学における戦争責任の追及」、『新日本文学』第一卷第三号、一九四六年五月、六月）。戦争責任を追及された文学者たちは、侵略戦争を翼賛するために筆をふるったという容疑をかけられたのだが、実際に銃を握った作家たちが戦地でどのような暴力行為を働いたのかという点は追及されることがなく、彼らもあえて告白する意思を持たなかった。なぜなら彼らもまた不本意ながら戦争に動員された一人の市民であって、他国を侵略する意思はもとより持たず、過酷な戦場で非理性的な行動がとられたのはやむを得ないことだったと、彼らが復員した日本社会のなかでは了解されたからである。しかし良心にもとづいて加害者である自分たちの行動を明らかにしておけば、戦争の悲惨な実態を伝え、惨劇を繰り返させないための誠めになったはずである。竹内は「魯迅の文学の根源は、無と称せらるべきある何者かである」（『魯迅』）と語ったが、この「無」とは歴史や事実を否定して闇のなかに消そうとするのではなく、それらを光のなかにさらけ出して真相を明確にしようとするエネルギーを持つものでなければならぬ。

2 国民文学論争と百花斉放運動

(1) 丸山眞男の視点

孫歌氏の『竹内好という問い』（二〇〇五年五月、岩波書店）は、日中双方に〈竹内好ブーム〉を巻き起こした。そのなかで孫氏は丸山眞男の「肉体文学から肉体政治まで」（『展望』第四六号、一九四九年一〇月）を参照にしながら、つぎのように論じている。

丸山眞男が田村泰次郎らのいわゆる「媒介なき実話精神」に対してその清算を進めつつあったそのとき、竹内好はそれまで棚上げされてきた日本の「肉体感覚」を解剖し、それと日本の近代主義との間の内在的連関を剔抉して、「自己になることを拒む」また「すべてとなることを拒む」可能性を探ろうと努力したのである（注七）。

この分析には、丸山と竹内を結んで戦後日本社会の政治思想の一齣を描き出そうとした孫氏の卓見が示されている。しかし丸山が同論文の冒頭部分で「つい先だって例の傷害事件を起こしたT氏、あの人が泊って行ったようだ。ところがここでまたアドルムか何かを大量に飲んで大騒ぎしたらしい」と言及しているのは、実は田村泰次郎ではなく田中英光のことであった。田中は一九四六年三月に日本共産党に入党し、徳田球一書記長の指示の下、沼津地区委員長として国鉄沼津機関区で党勢拡大に努めたが、翌年三月に離党して日本共産党とスターリンを批判した文章を発表する。次第にアドルム中毒におちいって、一九四九年五月には新宿で愛人生活を送っていた山崎敬子を薬物による妄想から刺傷させ、一〇月三日には師として仰いでいた太宰治墓前（三鷹市禪林寺）で自殺をする。

丸山によって「媒介なき実話精神」と批判されたのは田中の「野狐」〔知識人〕第二巻第五号、一九四九年五月）他の小説のことで、丸山は「肉体文学の「異常性」が結局私小説的日常性と同じダイメンジョンの上に立ち、ただその「恥部」を不均衡に拡大したにすぎないのと同様に、侠客型の地盤である反社会的集団というものも、決してわれわれの生活的基盤と質的・にちがった源泉から生まれるものではなくて、むしろ日本社会自体の恥部である家族制度の戯画化じゃないか」と痛罵した。孫氏

の整理によれば、丸山は「日本社会自体の恥部」という〈実体〉を乗り越えるために近代政治のフィクショナルな〈機能〉を重視したのに対して、竹内は、魯迅の「他者に内在しながら他者を否定するプロセスであり、それは同時に自己のなかに他者が入ることによって自己を否定するプロセスでもある」という「擽扎」の方法をふまえて、「自己になることを拒み」また「すべてとなることを拒む」可能性を探ろうと努力したとされる^(註30)。

孫氏には「丸山眞男におけるフィクションの視座」(「思想」第四卷第二二二号、一九九八年六月)と「丸山眞男における「政治」——丸山政治学の思考」(「思想」第三六卷第五三三号、二〇〇六年八月)という二本の論文がある。前の論文では、小林秀雄と正宗白鳥との思想と実生活論争をふまえ、昭和前期から「思想」は現実から分離した「人間の日常生活でないし自然・社会とは別次元のものであり、それ自体は抽象的で、独立的であり、実生活を支配する力でもある」精神構造であると考えられてきた。そして「抽象的で現実と訣別を宣言した「思想」が、今世紀前半の激動の歴史の中で、いかに歪曲され誤解されやすいものであったのか」、その「典型的な例」が田村泰次郎の〈肉体文学〉であったとする。

田村の反応は直接に小林を非難したものではないが、「思想と実生活論争」を構成する基本的思考のパタンを振り返れば、一一年間の歳月をはさんで見えない糸が二つを直接的に繋いでいることがわかる。田村は明らかに正宗白鳥の思考パタンをそのまま継承し、実生活の疑いえない絶対的価値を強調する。正宗と違うのは、その思考対現実の図式にヨーロッパ対日本という中身を入れただけである。この入れ替え自体は、むしろ正宗の「思想が現実に還元できる」と

いう実体的な思想認識の見事な実践となるほかない。「実生活から全く遊離した抽象的煩悶はない筈」と確信している正宗にとっては、丸山眞男の言う「分離」と「遊離」の区別をつけないかぎり、小生の言った実生活との訣別などはただの「意味ない空言」であろう。そして、このような現実感覚が、戦争を経て、田村の代表した日本の「肉体文学」へと逆転したのは不思議ではないのである。

孫氏は田村を、正宗白鳥に代表される自然主義文学の流れを汲む作家として位置づけているが、白鳥のいう「実生活」と田村のいう「肉体」とは根本的に違うものである。なぜなら田村は、思想を現実に還元させようとしたのでも、ヨーロッパ対日本の図式を示してみせようとしたのでもない。現実にフィクションを媒介させて思想の次元に昇華させるプロセスのなかに、虚偽がまぎれこむ可能性のあることを指摘したのである。〈肉体文学〉が一般読者から広範な支持を得たのは、露骨な性風俗の表現に魅せられた面もあるが、帝国日本が「大東亜共栄圏」という美辞麗句を連ねた〈思想〉を振りかざして犯してきた歴史的現実を、暴力には痛みをもって応じる血の通った個人の〈肉体〉を基点にして虚偽を告発し、いかなる抽象性にも懐疑の眼を向けるというのが敗戦日本の出発点で、日本社会はそれまで自分たちをとらえていた一切のフィクションを否定するところから再建される必要があったからである。それを経ることによってはじめ、孫氏が高く評価したような、理論と現実の關係において丸山が見いだした「二つの生産的契機」——「理論がフィクションとして持つ「責任」を理解する契機、つまり現実との距離感を保つことによってその機能の独立性を正当化するという契機」と「理論家が操作過程からこぼれ落ちてゆく素材に対する愛惜の念を理論的思想的

に位置づけるという契機」——を得ることのできる状況がようやく整うことになるのである。

孫氏によれば「丸山は思想史の限界を文学という他者によって示し、自分に対し、その境界において感じているディレンマを課題として課すことにより、現代社会科学ないし現代知のディレンマをわれわれに投げかけている」とする。丸山が日本自然主義文学や〈肉体文学〉を引き合いに出したのは、「文学論争においては深められなかった「肉体」と「精神」の緊張関係についての認識を深め、日本文学の肉体的特徴を初めて日本的な精神構造として位置づけ、フィクションの本質はア・プリオリに置かれている絶対的存在ではなく、便宜のための相対的存在だと強調し、さらにフィクションの自己目的化をも防止する考え方を真正面から提出」するためであったという。『大東亜共栄圏』というフィクションが現実以上の現実にもえてしまったことに対する反省を深めるという点では、むしろ丸山と田村とは同じモーメントを持っていたといえるだろう。しかし「媒介された現実を直接性における現実よりも高度なものとする」という「近代精神」への信仰は、あくまでも合理主義を重んじる政治学者の丸山にはあったが、人間が獣と化す過酷な戦場を体験したことによって合理主義をまったく信じられなくなった文学者の田村にはなかったのである。

さきあげた二本の論文のうち後の「丸山眞男における「政治」」では、孫氏は「アートとしての政治」という章を設け、「人間行動の政治的側面は政治的主体として抽象できるが、政治的主体はイコール人間という実体ではない。そのような主体の置かれている状況下では、時間と空間という両面において、つねに変化と転移が起こり、その一方、政治的主体の変化、複数の主体の相関関係の変化、場の変化、主体と場の変

化などが、複合した形で進行する」とし、それを理解するためには「日常感覚の位相での具体性」ではなく「いくつかの媒介を通して、出来事のイメージに反応」する「機能的な具体性」を考えることが必要だとする。そして文学者のなかで最も丸山の思想に近かったのが竹内好であったというのである。

(2) 竹内好の視点

竹内の国民文学論争については、島村輝氏の「浮沈する「国民」と「文学」——「国民文学論争」という問題系」(『文学』第五卷第六号、二〇〇四年一一、一二月)や内藤由直氏の「野間宏の抵抗と革命——戦後国民文学論の同時代性」(『社会文学』第三三三号、二〇一一年二月)などの優れた論文が発表され、同時代の思想状況のなかでの竹内の位置が一層明確に理解できるようになった。島村氏によれば、竹内は「ラジカルな近代主義批判」、「近代主義」の克服がすなわち「国民文学」形成の根本条件である」という主張を押し隠して、表面的には「整理」者という仮装をした。それを看破したのが福田恆存で、福田は「国民文学について」(『文学界』第六卷第九号、一九五二年九月)のなかで、竹内が「左翼」陣営からの「国民文学」の提唱との差異化をはかり、その露骨な政治主義とは一線を画するために「整理」者というスタンスを選び取ったのだと指摘した。福田の眼には「竹内のスタンスはマヌーバー的、似非「政治」的な許しがたいカムフラージュ」として映ったのである。さらに竹内は「近代主義」を超越するために「民族」「国民」という概念を使っているが、それらの概念は実は「近代主義」の産物であるわけで、福田は竹内の「民族」「国民」という概念を前提として疑わない「本質主義」的な思考法に対する、的確な脱構築的批判をおこなった

という。その一方で島村氏は、竹内が一定の評価を与えた野間宏の「国民文学について」（『人民文学』第三卷第九号、一九五二年九月）のなかに、「レジスタンス」「抵抗」への実践的参画」が提唱されていたことに対して「民族」「国民」といったスローガンのことばに終始した論文の横行する空虚さを補完する、「国民文学」の内実をホジティブに語った稀な例であった」とする。

この野間のスタンスを批判したのが内藤氏で、内藤氏によれば「野間の論理を支えていた「反米・反戦の思想は政治と文学の一体化、および権力奪取による隷属からの解放として具体化されたが、一方で共産党新綱領の影響を深く刻み込んだ野間の国民文学論は悪しき公式主義の産物として一絡げに否認されることになった」。しかも「野間と竹内の論争は戦争への加害責任の問題を忘却し、六全協は野間の議論を忘れることでその忘却過程自体を忘れ去った」という。内藤氏の厳しい批判は、本稿で指摘したような、自己の従軍体験を語らなかつたことにもみられる竹内の本質的な問題に向けられている。

これらの優れた先行研究をふまえながら、国民文学論争における竹内の主張を再検討してみよう。国民文学論争において竹内は「啄木を通じて逆に透谷、独歩の素朴なナシヨナリズムの精神を回復しなければならぬ。大切なのは革命の伝統であって革命の結果ではない。結果だけを人にもらいたがる乞食根性は、文学を墮落に導く。／中国の人民文学を日本へ導き入れようとする態度に、この乞食根性が現れていないかを私は恐れる」（『ナシヨナリズムと社会革命』、『人間』第六卷第七号、一九五一年七月）と語った。「中国の人民文学」の本質は「文学者が自分で特権を否定していくという、一種のナロドニキに似た運動があって、それが国民文学の発生のために、地盤を掃除した。その代表的人物が魯迅で

ある」（『中国文学の政治性』）とされたのである。

「新日本文学」第一三卷第二号（一九五八年二月）には、竹内が司会者を務めた座談会「中国の現実と日本の文学者—中国旅行からかえって」が掲載されている。中国の作家協会と対外文化協会の招待によって、本多秋五や中野重治、多田裕計、十返肇、堀田善衛、井上靖、山本健吉などの作家が北京や上海、広州、重慶、成都を訪問した。井上と山本を除いて全員がこの座談会に参加しているのだが、彼らは中国で折からの「百花斉放百家争鳴（双百）」を目撃していた。多田によれば、「戦争中は民族戦線」の側に立って銃をとった老舎が「党の路線を是認しながら、且つ文学においては自由と個人的な力量の違いは非常に大事だ」と繰り返し説き、「解放後に出た若い作家を持ち上げ」る一方で「あまりにも教条主義に陥るといふこと」には警戒して「さかんに若い人をたしなめて書いている」ことに非常に感心させられたという。老舎は「人民日報」英文版（一九五七年一月一六日）に「文学にはそれ自身の規律性がある。名前は文学でも、政治専門用語ばかりでは誰も読みたがらない。ここ何年か文学の領域でも公式化と概念化の間違いがあった。民主国家においては誰でも批評する権利を持っている。作家が書きたいと思う内容は、自由であるべきだ。人民に害のない作品なら何を書いてもいいし、発表してもいい」と記している^{注60}。作品のなかに自殺や殺人の場面が自由に描くことができなかつた時代、老舎の『茶館』（一九五七年七月）は登場人物の王利発を自殺させ、革命参加を積極的に描かなかつた。（『右派闘争』）がはじまると、老舎は「百花斉放の積極的作用は火をみるより明らか」であるとしたうえで、「現在我々は、政治と文化の領域で、反右派闘争の真っ只中にある。右派分子は党が開始した教条主義に反対する運動の機会に乗じて、解放以来労働者人民のすべての成果を中傷し

て、捕まった」（作家談寫作）、「中国建設」第一期、一九五七年一月）と論じている。このように〈反右派闘争〉では「右派」を弾圧する側にまわった老舎であったが、〈文化大革命〉の一九六六年八月、今度は老舎が〈反革命分子〉として紅衛兵に糾弾されて殴打された。

再び座談会「中国の現実と日本の文学者」に戻れば、北京で面会した中国共産党中央委員会宣伝部副部長で作家の周揚（一九〇八—一九八九）の印象が盛んに語り合われ、竹内も「人物評論だけに興味を持つのは日本人の悪いくせですが」と断りながらも周揚の人となりを尋ねている。出席者はみな〈胡風問題〉と〈丁玲問題〉に触れ、本多が「丁玲は人民内部の問題、胡風の方は反革命」と発言している。一九五五年に「反革命集団」の頭目として逮捕された胡風と、一九五七年に「反党集団」の一員として逮捕された丁玲とは、日本の進歩的作家たちにとって関心の的で、周揚がどのような態度で取り締まりをしていたのかを知りたがっていた。この問題に関し、竹内はつぎのように発言している。

つまり、周揚路線とは言つてはいけなしか知らんけど、今の党の指導性ですね、これは永久不変のものじゃないし、変つてくるだろうと思うし、変つてくるのは新しい若い作家がたくさん出て来て、文学運動が広汎に広がってくるスピードがあるわけですね。それがどういうふうにして今の上からくる指導性の中に吸収されてゆくか、その変えてゆくものが出てくるかという新興の気運ですね、そんなものをどんなふうにお感じになりましたか。自由化の方向がますます盛んになるのか。それが文学の領域ですね。

残念ながらこの後「自由化の方向」が「ますます盛んになる」ことは

なく、孫氏が読みとろうとした「文学の政治的機能」という竹内の主張は裏切られることになった。〈文学の自律性〉は雑誌「人民文学」を通じて日本共産党主流派が主導権を握ろうとした国民文学論争でも、竹内が「政治のプログラムをそのまま文学に適用」することに警告を発していたのだが（「文学の自律性など—国民文学の本質論の中—」、「群像」第七卷第一号、一九五二年一月）、他者を否定し自己を否定しながら発展する〈否定弁証法〉ともいうべき文学本来の機能がまったく機能不全におちいって、他者を否定するための強権発動の装置になってしまったのである。

ところで「新日本文学」同号には、訪問団と同じ時期に中国に滞在し、日本文芸家協会と中国作家協会の共同声明（一九五七年一月一〇日）には署名に加わった中島健蔵が「世界観以前の問題—中国で感じたこと—」を寄稿している。中島も周揚と〈丁玲問題〉に触れながら、日本と中国における精神風土の差を指摘している。中島によれば「きわめてふつうに考えて「よくないこと」、たとえば衝動的な犯罪とか、人の迷惑になるような利己主義とかを、あつさりよくないと認め、それをなくすことを考えるか、あるいは、よくないにはちがいないが、それらの悪は、人間にとつてやむを得ないものであると認め、どこまで行っても人間の弱点はなくならないと信じ込むか、それが分れ道」になるのだとしたうえで、つぎのように主張する。

もつとはつきりいえば現にこの目で見て来た中国では、人間の弱点を認めるにしても、それをよりどころにして文学を創作するという現実的な根拠がない。それに反して、日本では、どんなに人間の弱点をおおいかくそうとしても、やりきれないほど社会にそれが充満

しているので、文学はそれをよけることができない。

中島によれば、中国では政治的に「人間の弱点」を根絶しようとしているために、文学には「人間の弱点」をテーマにする余地が残されていない。逆に日本では政治的には解決できないと諦観された「人間の弱点」こそ文学のテーマだと考えられている。すなわち「できるだけ人間の弱点を少なくすることを望むのか、逆に、人間の弱点がなくなれば人生がおもしろくなくなり、文学はあがつたりだと考えるのか、これが決定的な別れ道である」という。結局「人間の弱点」を描こうとする私小説（日本自然主義）が支配的な日本において、中島は「人間の弱点」を克服したと思ひ込ませる「形式的な道德主義」に反対である一方、「弱点の存在が文学の第一のよりどころ」とする文学にも反対であるというアイロニーを抱え込むことになったのである。

中島は「人間の弱点」を政治が克服すべき、あるいは文学が描写対象とすべき〈実体〉としてとらえていたとすれば、対照的に竹内は、それらを〈機能〉としてとらえようとしていた。竹内によれば、中国文学では「文学者が自分で特権を否定していくという、一種のナロドニキに似た運動」が発生し、「文壇的なギルド意識」を排除する〈機能〉としての文学が「国民文学の発生のために、地盤を掃除した。その代表的人物が鲁迅である」という（『中国文学の政治性』）。竹内は「プロレタリア文学の伝統は、規範としての小林を絶対にして、そのことで大衆と小林を引きはなしていないか」と、直接的には小林多喜二に代表されるプロレタリア文学運動を批判したのだが、このような批判は、「人間の弱点」を弱点として提示して保存することを通じてある種の自己肯定がおこなわれていた私小説の欺瞞を撃つことにもなるだろう。竹内は「文学が社会的に開放さ

れた形であれば、場の問題が価値の問題と混同されて文学の内部にもちこまれるはずがない」とし、「場」が確保されれば「文学者が文学の問題について発言することが同時に政治的な発言でありうる」ようになるとした。孫氏は竹内の言及した「場」を「機能」として読み替え、「常に変動しながら、互いの力関係を変えていく。そして文学は、そうした機能的なインターラクションの中ではじめて、それ自身の独立性を確立することができる」とし「機能の間の交錯した関係」の重要性を主張した^{注7)}。

「他者に内在しながら他者を否定するプロセスであり、それは同時に自己のなかに他者が入ることによって自己を否定するプロセスでもある」という鲁迅の「掙扎」の方法を学ぶことによって^{注8)}、いずれの党派も、いずれの文学集団も安易な自己肯定と硬直的な自己保存をおこなうことを止め、つねに大衆に開かれた「場」を構成することができる。そのような〈機能〉としての文学を基点にすることによって、竹内は真に革命的な思考を戦後日本社会に根づかさうとしたといえよう。

注

- (1) 防衛研修所戦史室『昭和十七・八年の支那派遣軍』（一九七二年五月、朝雲新聞社、四三六頁）
- (2) 南泉人民政府紀念碑碑文 (<http://baike.baidu.com/view/373912.htm>)
- (3) 『竹内好全集』第一七巻「年譜」（一九八二年九月、筑摩書房）
- (4) 『竹内好という問い』（二〇〇五年五月、岩波書店、七九頁）
- (5) 同右、六六頁
- (6) 吉田世志子「百花斉放」から「反右派闘争」の中の老舎—一九五七年「茶館」を中心として」（『関西大学中国文学会紀要』第三〇号、二〇〇九年三月）参照

(7) 前掲
(4)、六七頁

(8) 前掲
(4)、六六頁